

中庭

宮殿の方形の中庭はひっそり静まりかえって
敷きつめられた肌色の大理石はひんやりして
午後の影がその半分をおおっていた

庭を囲む廊下に腰掛けて、俺は
頬づえついてその中庭を見つめていた
風もなく音もなく、砂漠の中の宮殿はひっそりしていた

その大理石の上の光と影の境に
もっと柔らかな肌色をした男女が
影に染まり、光を浴びて、ひっそり動いている

息をしているとも思われぬあの二人は
しかし波立つように身体をくねらせている
上になり、下になり、影になり、光になり・・・

光と影の境界線が彼らの肢体をなぞってゆく
男の手足の筋肉の動きや、背骨の曲線や
女ののけぞった弓なりの線や、乳房のふくらみや・・・

全くの無音で、人間の心臓も止まっている
男も女も、その顔には石のように何も無い
ただ、形だけひとつの憂いに似た無音の運動のみがある

この熱地獄の砂漠の中にある宮殿の中は
これらのひっそりした静寂の故に
ひんやりとした、じっと動かない水槽のようだ

情熱も歓喜も憂愁もない抱擁は
ただ脈々と無表情に行われ
それを見る俺もまた何の感情も抱かない

(1982.6.)